

東北ヘルプ ニュースレター

2020年クリスマス号

目次

- 巻頭言：美しさと、悲しさと 1～2頁
- 3.11 メモリアル：被災地復興支援プロジェクト 3～5頁
 1. 本当の「復興」を：石巻広域ワイズメンズクラブとの協働
 2. 地域の誇りを：訪問・傾聴・収録そして Youtube
 3. 新しい販路を：「復旧から復興へ」ではなく
- 結局、聞いて、背中を押す、ということ：
「仙台駆け込み寺」の始まり 6～9頁
- フクシマと、いわき市と石巻市と岩国市と岩内町と 10～17 頁
- 巻末言：「10周年」に向けて
「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」を目指して 18～21 頁
- 収支計算書・事務局より 22 頁



巻頭言：美しさと、悲しさと



東北ヘルプ「ニュースレター」2020年クリスマス号を、お届けします。

「新型コロナウイルス」騒動の中で、被災支援活動も大きな影響を受けました。この号の最後の記事になる「巻末言：『10周年』に向けて：『宮城南三陸 3.11 追悼記念会』を目指して」の冒頭には、そのことが具体的に報告されています。

そうした中で、今回は特に、「10年目の被災地」を、広く深く、ご紹介する号となりました。

「広く深く」ということで言いますと、この後の最初の記事である「3.11メモリアル：被災地復興支援プロジェクト」には、長距離移動が制限されたことを奇貨として、石巻という一つの地域にとどまり、つながりを深めて、東北ヘルプが積み上げてきた試行錯誤を活用し、広く新しいネットワークを全国に伸ばしてみたい、という試みを、ご覧いただけたと思います。

「広く」ということで言いますと、「フクシマと、いわき市と石巻市と岩国市と岩内町と」と題した記事には、宮城県と福島県をつなぎ、「津波被災地」と「原子力災害」の二つの被災地に生きる人々の出会いの様子が記されています。約半年間、遠距離移動の一切を控えていた東北ヘルプですが、10月になってから、福島県いわき市を訪ねました。「赴いて、人が出会い、出来事が生まれる」ということを、私たちは被災地で何度も目にしてきました。それは本当に貴いことであることを、改めて知らされたことでした。

「深く」ということで言いますと、被災者各位の深くこじれた苦勞の一つ一つに、じっくり向き合う活動を続けてこられた支援者が、「10年」ということを意識して新しい拠点を得たご様子を報告する記事があります。それが「結局、聞いて、背中を押す、というこ

と：『仙台駆け込み寺』の始まり」です。

福島県いわき市を訪問した際、併せて、久しぶりに福島県川内村を訪れました。皆様からお預かりした献金をお届けし、「最初に帰村した強制避難地域」の今を拝見させていただきました。つい数年前に川内村の「温浴施設」は「天然温泉施設」となった、とのことでした。その施設から見える山のどっしりした様子は、原発事故前と、何も変わっていない。でも、震災以後、今年も、その山には「松茸」が大豊作であるそうです。どのマツタケをとっても、計測すると「食べることができない」レベルの放射能が検出されるからです。「そうは言っても、覚悟して、食べてるけれどね。もったいないから」と、川内村に生きる人は、静かに語っていました。



この「巻頭言」の最初に掲げたのは、福島市にある吾妻山です。紅葉が輝いていました。秋の間、ずっと、2000メートル近い山頂からゆっくり、赤と黄色に染まった木々の色が降りてくる。そんな美しい光景まで、福島駅前から、自動車で1時間で到着できるのです。そこにあるものはすべて、穏やかで、澄みきって、美しい。それが、福島です。でも、そこに生きる人々は今も、低線量放射線被曝と向き合う生活を続けておられる——10年も、続けてこられた。「美しさ」と「悲しさ」が、両方とも確かに、そこにあります。

この下に掲載しているのは、石巻市内を流れる北上川の葦の林です。ここにも、美しく穏やかな景色が広がります。しかし、この川底は、2011年3月11日以来、1メートル近くも地盤沈下し、葦の多くが成長しても水面まで伸びることができず、その数を減らしたと言います。そして、その対岸にあるのは、つらい悲劇を伝える大川小学校なのです。

被災地には「美しさ」がある。「美しさ」は「悲しみ」と響き合って、そこにある。そんな被災地に「10周年」がやってきます。多くの人が、これまでの歩みを振り返り、総括したり、総括できない自分を見つめたり、しています。そんな息遣いを、皆さまにお届けできればと思い願いながら、この「2020年クリスマス号」を編集しました。どうぞ、お読みください。

2020年10月21日 事務局長 川上記



3.11 メモリアル：被災地復興支援プロジェクト

2020年10月21日
東北ヘルプ事務局長
川上直哉

1. 本当の「復興」を：石巻広域ワイズメンズクラブとの協働

東日本大震災の被災地は、今、「10年目」の日々を送っています。そしてもうすぐ「10周年」を迎えるのです。「復興」という言葉が、時々、聞かれます。でも、その実は、どこまでも「復旧」の延長線上に、とどまってしまう。そんなふうに思われます。「復旧」＝「旧に復する」の延長線から出られない、とは、どういうことか。東日本大震災の被災地にとって、それは「少子・高齢・過疎」の状態に戻る（むしろ、それを加速させる）ということを意味します。みんなそれを、うすうす気づいている。それできつと、「復興」という言葉は、いつもどこか、「白々しい」ものとなっているように思います。



でも、よく見てみれば、現場には、「新しい何か」が興り始めている。昔、たとえば「1945年の敗戦」後のしばらくの間、きつと、そうであったように。そうした事例を見てみれば、私たちはきつと、「復興」という言葉を、確かな手触りをもって、使いこなすことも、できるかもしれません。

「石巻広域ワイズメンズクラブ」というキリスト教系のボランティア団体があります。「楽しく奉仕する」ということを語り合い、被災後の石巻で、仙台 YMCA と連携して活動を続け、もうすぐ5周年を迎えるクラブです。その前身は、東京 YMCA を中心に震災直後の石巻で展開された、全国のワイズメンズクラブと YMCA の被災地支援活動にあります。

「10周年」を控えて、石巻広域ワイズメンズクラブの皆さんは、「3.11 メモリアル：被災地復興支援プロジェクト」を立ち上げてくださいました。東北ヘルプも、その活動に協力させて頂いています。

「YMCA 石巻支援センター」が開設されたことを知らせる 2011 年 11 月 25 日付チラシ
<https://tokyo.ymca.or.jp/support/pdf/NewsLetter20111125.pdf>

「コロナ」の騒動の中、広く「東北太平洋沿岸全域」を支援することは、難しくなりました。でも例えば、事務局長が住む「石巻」に集中してみれば、なお、できることが多くある。とりわけ、これまで皆さまに支えていただいていた進めてきた「東北ヘルプ」の試行錯誤は、ここに活かされる。そうしたことを実感した、今年度の上半期となりました。

以下、そのご報告を致します。

2. 地域の誇りを：訪問・傾聴・収録そして Youtube

昨年秋（2019年9月7日）石巻市内で、一つのシンポジウムが行われました。それは「復興のために必要なこと」と題して、東北ヘルプニュースレター「2019年クリスマス号」に採録されました。そこには高成田享さんからの「復興」に向けた助言が豊かに語られていました。

ニュースレター「2019年クリスマス号」は右のQRコード、
または URL: <https://xfs.jp/6yX41>
そして東北ヘルプホームページから、ご覧いただけます。



東北ヘルプ ニュースレター

2019年クリスマス号

目次

- 2019年の東日本大震災被災地概況 1~3頁
 - 被災地の現状
 - 「復旧」という単語
 - 「復興」とは何か
- 復興のために必要なこと 4~13頁
副会挨拶（「すべての風」大林健太郎さん）
シンポジスト自己紹介
原発被災地・南相馬市小高区と津波被災地・石巻市
石巻の可能性
日本の福祉制度
過去に残された、未来に開かれる誇り
「新しい社会」をよめて「民主化」へ
- 収支計算書・事務局より 14頁

高成田さんは、開口一番、「魅力がある場所」「住みやすさ」ということを語っていました。「自分たちが、この町はいい町だ、楽しい、と思わなくて、どうして、人がここに住みますか」という言葉も、その時、思い出されました。

石巻には豊かな海と水田と畑と里山が広がっています。多彩な中小企業が操業しています。そして、布施辰治、志賀直哉、内村鑑三、支倉常長、川村孫兵衛といった人々が育ち、あるいは活躍した。そうした場所がここにある。そうしたことを思い出して、「未来に開かれた誇り」あるいは「自分たちを自分たちでほめて閉じこもるようなものではない 誇り」を、確かに確保すること。そのことを、私たちは今、必要としていると、話し合いました。

石巻の「偉人」の一人に、菊田昇という医師がいました。1991年5月に没した、最近の人です。最晩年の1991年4月、国連の国際生命尊重会議東京大会で「第2回 世界生命賞」を受賞したことで知られています。この菊田医師の生涯を描いた小説が、最近、出版されました。その本の中で、菊田医師はその兄弟と、石巻のことばで、このように会話をしていました。



「東京や横浜、それに仙台さ比べれば、たしかにちっちゃえ町だ。でも、石巻には漁港、田んぼ、工場など何でもあって、貧乏人から大金持ちまでそろってる。人間のありがたさもいやらしさも、全部手の届く範囲にある。」

「んだな」

「石巻の人間だからわかる世の中の矛盾はある。石巻で医師をしながらできるごどもある。東京や仙台じゃ、あまりに大きすぎるべし、つぶされるごどはあっても、石巻ならできんだ。今、おめが国や医者たちを相手にしてんのは、まさにそんな闘いなんだと思う」

「そうがもしんねえな」

「昇、母ちゃんが言ってたように、石巻から日本を変えろ。苦しんでいる人だちば助けてやれ。石巻は日本の縮図なんだ。わがったな」

「ああ、がんばるよ」

——石井光太『赤ちゃんをわが子として育てる方を求める』小学館、2020年。

今、石巻広域ワイズメンズクラブは、石巻圏の各地を回って、復興を担う方々の営みを拝見し、また、その背後にある歴史を記録しています。趣味の「珈琲」を精錬させ、そこから故郷を全国に発信する「石川さん」がいます。有機農業ササニシキを自分の子どものように慈しみ育てながら、遠く世界に視野を広げる「木村さん」がいます。地域の歴史と誇りを結実させたような黒船「サン・ファン・パウティスタ号復元船」の保存運動に取り組む「齋藤さん」がいます。震災の出来事がハワイと石巻をつないだ奇跡の出来事を絵本にした「千葉さん」がいます。「世界一」と名高い金華山沖の海水を用いて、地域の人々の協力の中で「金華塩」を製造販売する福祉事業所「くじらのしっぽ」の皆さんがいます。そして、大真面目に「障がい町おこし」と語り、明るく伸びやかに集う「べてるの風」の皆さんがいます。豊かな広がりがある、確かに、ここにはあるのです。あるいはそこから、本当の「復興」を、具体化できるかもしれない。そんな風に、心を強くしています。

今、この皆さんと出会う旅を、Youtube のビデオにして発信しています。「石巻広域ワイズメンズクラブ」とインターネット検索くだされば、すぐ、ご覧いただけます。被災地の豊かさを、是非、ご覧頂ければ幸いです。



石巻広域ワイズメンズクラブの Youtube チャンネルは、この QR コードからも、ご覧いただけます。

3. 新しい販路を：「復旧から復興へ」ではなく

2020年のシンポジウムで、高成田さんは、以下のように語っていました。

「復旧から復興へ」というだけでは、だめだ。もっと消費者と結びつくような工夫をしてほしい。例えば「銀座の真ん中に復興物産館をつくる」というイメージです。そういうことでつながりが新しく生まれて、生産者と消費者が直接つながっていく。そういうことが大事だろうと思うのです。今日ここにおられる水産加工業を専門とする皆様も、まさにそういうことを実践されているわけです。でも、かなりの水産加工の方々は、今も変わらず所謂「下請け」的な仕事を担っている。そうすると、消費者とは、結びつきにくい。でもこれから頑張ろうと思うならば、生産者と消費者が直接結びつくことが大事です。「かつて」であれば、そこに商社が入る、ということになったでしょう。でも今はインターネットが機能しています。いろいろな形でボランティアの人たちも関わりを持って下さっています。直接結びつく可能性が、広がっているのです。そういうことを活用すればいい。まだそこに不足を感じます。



「銀座の真ん中に復興物産館をつくる」ことは、私たちには難しいと思います。でも、私たちにもできることがあると、ヒントを頂きました。Youtube のビデオを作る旅をしながら、皆さんと、話し合いました。そして、今回、「3.11 メモリアル：被災地復興支援プロジェクト」を開始することとなりました。その事務局は、東北ヘルプが担当させていただくことになりました。その要諦は、以下のようなものとなりました。

1. 「被災地の復興」は、地域の中小企業の復興である。
2. 「復旧」を越えて、地域の中小企業各位の新しい販路を拓きたい。
3. その為に、ワイズ・YMCA・教会関係のネットワークを活用する。
4. 逆に、ワイズ等のチャリティ活動に被災地域の中小企業も協力する。
5. そうして、被災者への支援活動がネットワークの中で活性化する。
6. 具体的には、今回、売り上げの約2割はチャリティとなり、商品を介して人の出会いとつながりを生み出す。

以上を通して、復旧を超えた復興へ、新しい出会いと広がりを生み出す歩みへ、みんなが進みたいと願っています。とりわけ、今回、具体的なチャリティー活動として「3.11 子ども文庫」を継続発展させることができると願っています。今の小学生は、もう、震災を直接知らない世代になっています。子どもたちに、大切なことを伝えたい。そんな活動が、「3.11 メモリアル：被災地復興支援プロジェクト」によって加速できると願っている次第です。皆様のご協力を、お願いする次第です。（了）

3.11
こども文庫

日付：11/7 (土) ・12/5・1/4
時間：13:30～15:30 (無料・第一・土曜日)
場所：旧石巻榮光幼稚園
(石巻市大町東2-12-3) 国会2階ホール

みんなで
リトミック!
楽しく!楽しく!
歌を聴かせよう!
石丸由理先生!

「3.11」って、
なんだろう?
2011年の東日本大震災を、
絵本でお話ししましょう。

感染症対策のため、先着20名の定員制
といたします。ご参加の際は、下記電話あ
るいはショートメールに、ご連絡ください。

電話・ショートメール
090-1373-3652 (川上)

主催：石巻広域アイズメンズクラブ
公益財団法人 財団 YMCA
協賛：2000 石巻市民会館ネットワーク・東北ヘルプ
後援：石巻市教育委員会

©INK・TYO

東日本大震災に関する絵本の
「読み聞かせ」等の活動
「3.11 こども文庫」の
お知らせチラシ
小学校で配布いただきました。

結局、聞いて、背中を押す、ということ

「仙台駆け込み寺」の始まり

2011年の震災は、多くの人々の心を動かしました。動かされた人々は寄り合い、力を合わせ、できることを探して、そしてもう「10年」になろうとしています。

支援者として、そして多くの支援者の支柱として、ずっと現場に立ち続けてこられた織笠英二さんは、震災直後から津波被災地で活動し、東京からの支援者と深くつながり活動を広げ、そして今年、新しく「仙台駆け込み寺」を仙台市の「いろは横丁」にオープンさせてくださいました。まだオープンから一ヶ月たない9月26日、東北ヘルプ理事の中澤竜生牧師が、織笠さんにお話を伺いました。

2020年10月20日 事務局長 川上直哉 記



中澤：震災以来、たくさんの方々の支援に携わってこられましたね。織笠さんが「支援」ということを開始された、その最初の頃から振り返ってみてくださいますか？

織笠：やはり、震災の現場で受けた衝撃は、大きかったですね。私は岩手県の山田という場所で生まれました。そこも津波で大きな被害を受けた場所の一つです。津波の被害によって「故郷がなくなった」という感覚は、自分自身の痛みとして、はっきり感じたのです。

私はずっと、仙台市内の民間企業で仕事をしていました。震災の時、自分の事務所から自動車で30分行った先がすごいことにな

っていました。そんなに近くだったら、何かできないかと、翌週から、土日ボランティアを始めたのです。

ボランティアを続けて、「がれき撤去」が終わった頃から、気づき始めたことがあるのです。みんなが、愚痴を言いあったりしている。心の中身を吐き出している。その様子を見て、「こうして話し合っている内容は、警察に行くことでも、弁護士でも、近所に行く

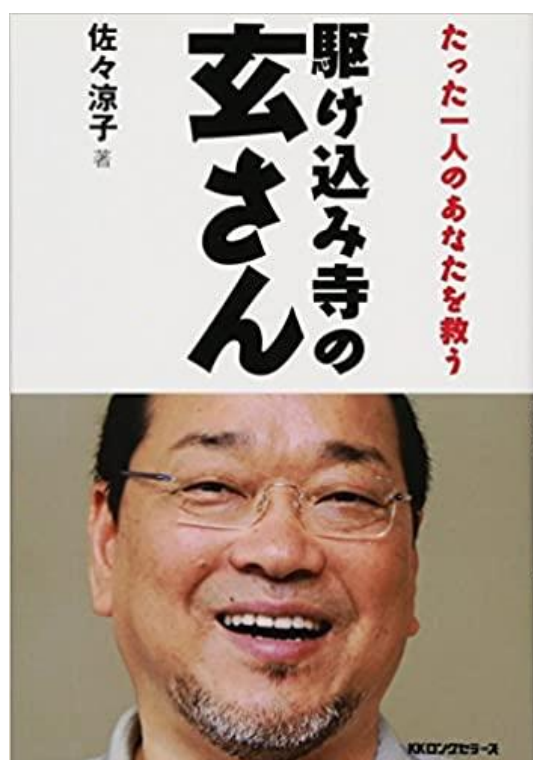
ことでも、ないのだ」と。「でも、誰かが受け止めて、必要なら助言をしなければ、時に、命にかかわることもある」と、そう、気づいたのです。特に、仙台市の中心部で生活していた私に、津波の被災地（宮城県の沿岸部）の皆さんは、愚痴を言いやすいようでした。つまり、「よそ者」の役割が、そこにあった。そしてその「愚痴」のなかに、深刻な内容も、お手伝いできる事柄も、あった。そのことに、気づいたのです。

それで、考えました。「だれでも・気軽に、行ける場所があればいいのに」ということです。そうした中、「2012年7月、被災地に駆け込み寺ができる」と新聞に記事が掲載されました。「まさにこれだ」と思ったのでした。それは、東京都新宿区歌舞伎町にある「公益社団法人 日本駆け込み寺」の被災地支援活動が本格化する、という内容だったのです。私は、仙台でのオープンの日そこに訪ねて、「これこそが必要だ」と、お伝えしました。

中澤：東京を中心に困窮者のケアをしている「玄さん」で有名な「日本駆け込み寺」ですね。

織笠：はい。「玄さん」こと、玄秀盛さんは、2012年から実に5年間、仙台にスタッフを常駐させてくださり、具体的に、仙台にかかわってくださったのでした。そして5年が経って「ある程度役割を終えた」ということになり、仙台の支援事務所は閉じられることになりました。そこでボランティアをしていた私たちは、玄さんと相談して「活動を続けさせてください」と、お願いしました。玄さんは快諾してくださり、有志による「100%ボランティア」での活動が始まりました。仙台市民活動サポートセンターで事務所を借りて、3年間、2020年8月まで、その形が続いたのでした。

そして今月、ここ、仙台市の中心にある「いろは横丁（壱貳参横丁）」のなかに、新しい事務所を構えて活動を開始したのでした。「いろは横丁」は、人情がある場所、入りやすい場所だと思いました。さらにありがたいことに、この地の利を考えると、今の家賃は「安い」と思います。



「玄さん」について紹介している本。
佐々木涼子著『駆け込み寺の玄さん』
KKロングセラーズ、2011年。

中澤：震災から「10年」という時間が、もうすぐ経とうとしています。震災直後から活動を続けてこられた織笠さんは、この10年で、どう変わりましたでしょうか。

織笠：今は、もう、被災の爪痕も見えなくなってきています。でも私は「人に会いに行く」ということを続けています。そうした中で、私は「聞き書き」ということを続けています。目の前に被災した方がおられる。その方の家もなくなった、親族も亡くなった、全部なくなった、としても、でも、心の中には「何か」

がある、それを話してもらおう。生まれてから、今までのことを、震災に関係なく、語っていただいて、それを聞いて「自分史」として編集して、本にして、差し上げる。——そういうことを続けてきました。今までに60人くらいの人生を、本にしてきたのです。その中で「なぜ、そうなったんだろうとか」とか「こ

うなっちはっきり、人の嫌なところが見えた」とか「自分はなぜ助かったのか」とか、そうした苦しい胸の裡を、客観的な言葉で、聞いてきたのです。それで、そうした心の声を聞き取る場所があればと思って「駆け込み寺」の活動に参加したのです。

私の会社では、積極的に市民活動を行ってきましたので、私は、被災地の支援のプロジェクトを担当することになりました。被災企業の立ち上げに協力する、という仕事でした。その仕事を一通りしてから、さらにもっと深く支援をしてみたいと思って、定年前に会社を辞めて、政府の復興庁の職員募集に応募して採用していただきました。そうして今、いよいよ「10年」を区切りと考えて、この新

しい拠点を得、来年度以降、どうしようかと考えています。福島のことを、気になっています。



左が織笠さん。右が中澤理事。仙台駆け込み寺の二階にて。

中澤：東京の「駆け込み寺」では、刑務所からの出所者等、特別な理由がある方の相談が多いようですね。

織笠：こちらでも、今までに5人くらい、「もう行くところがない」という方が、荷物を持って、他県からやってくる、ということもあ

りました。そういう時は、シェルターを探します。これまで、キリスト教の方などが、とても良い助力をくださいました。

中澤：「駆け込み寺」の働きは「緊急支援」が主となるのですか？

織笠：支援にあたって、「リピーター」は、作らないほうがいい、と思っています。相談の中で、前向きになってもらって、もう来なくてよくなる、そういうことを目指しています。「話す」ということに依存症的にこだわってしまう方もいるのです。「寄り添いながら、生活をずっと見て行く」というスタイルは、なかなか、取れません。みんな、ボランティアです。限界は、あると思っています。ただ、私は、携帯電話で、24時間、いつでも相談を受けていました。

今、新しい拠点を得て、少し変わりました。ここは飲み屋さんが多い場所です。女性のボ

ランティアスタッフが多いものですから、「荒っぽい人」が来ると困るということで、「女性・子ども専用」と掲げています。男性の方は、電話をかけていただいて、個別対応をしています。まだ、初めて一か月です。これからですね。

今までも、「未経験・無資格で、できることをする」という姿勢で進もうとしてきましたし、これからもそうしたいと思います。運営は、寄付金や基金からいただいてやっています。「支える会」を、今から作ります。今、この土地に移って、これからどうしようかと、いろいろ、考えています。この働きを知って、献金してくださる方があればうれしいです。

中澤：「玄さん」の活動はとても有名で、テレビ等で取り上げられていますね。そうした「東京の活動のイメージ」を持っていましたが、ここは、仙台のスタイルを確立しているのですね。

織笠：先日、玄さんがやってきて、公益社団法人の仙台支部の名前を使ってもよい、と言ってくださいました。ありがたいことです。でも、スタイルは、全然、違います。玄さん

のように、できません。結局、聞いて、背中を押す、ということが、今の働きのすべてです。ひたすら、その人が持っている答えを引き出し、応援することを目指しています。

ただ、「傾聴しっぱなし」には、ならないように努力しています。「友達が困っているな」という感覚で、対応しています。そして、仲間のみんなで情報をシェアして、どんな対応ができるか、話し合うのです。高校生から70代まで、40人くらいのボランティアが、かかわってくださっています。それで、「一人で相談事例を抱え込む」ということにはな

らないように工夫ができるのです。

施設は一階と二階に分かれています。「ちょっときたよ」という感じで立ち寄ってもらい、和気あいあいと話をしてもらおう、ということを一階でやっています。そして、深刻な相談となりましたら、二階を使うのです。

ホームページも作りました。



仙台駆け込み寺のホームページ

中澤：具体的には、どんなことを聞き取り、そして、どう支援しているのですか？

織笠：一つ一つの背後に「震災があるな」と思いながら、いろいろな話を聞いています。ここ仙台の「いろは横丁」でも伺いますし、沿岸部にも出かけて行って「出張駆け込み寺」もします。例えば「土地をどうしよう」という話から始まって、「家族のこと」を聞くことになり、「生活が困窮している」という話になる、ということが多かったように思います。

9月1日から始めたばかりの、ここでの活動ですが、手ごたえは、あります。多い時で一日に三から四件のペースで電話相談を受けて、夜に実際にお会いする。そんな感じですね。東京から来た人という人もいました。でもやはり仙台の人の相談が多く、東北六県からの相談がほとんどです。あるいは、遠隔地

にいる親御さんが、仙台にいる息子さんを心配して、電話してくることもありました。

例えば「裁判に負けてアタマに来たので、弁護士の家に放火したいと思っている」という相談も受けました。そういう時、私は仏教者なので、こんな風に考えます。まず、人間には必ず、心があり、「仏性」というものがある。ただ、自分の心の中に垢があって、それが見えなくなってしまう。その垢を取り払って、大切なものが見えるようにしなさいと、仏教では教えられます。これはきっと、普通の言葉で言いなおせば「良心がある」ということだと思うのです。そのことを大切に、じっくり向き合う。そして具体的な支援につなげています。

中澤：本当に見返りのない仕事ですね。でも、尊い。被災地の支援活動が、こうして展開していることを、本当にありがたく思います。これからもご一緒に、ゆっくり、進んでまいりましょう。

フクシマと、いわき市と石巻市と岩国市と岩内町と

2020年10月1日、東北ヘルプの事業として、いわき食品放射能計測所に「TEAM ママベク」のメンバーお二人を、お訪ねしました。ニュースレターの呼びかけに応じてくださった皆様からの指定献金をお渡しするためでした。

あわせて、「子どもの健康を考える会・いしのまき」のメンバーお二人と、石巻市北上町十三浜の漁協で女川原発の問題と向き合ってきた佐藤清吾さん、そして今年度からいわき食品放射能計測所の所長となってくださった大川牧師と、そのお連れ合い様に、お話を聞きました。



お話は、東北地方にある「原発」、中国地方にある「基地」、北海道にある「原発」と、三つの「国策」の共通する痛みが、互いに反響し合うものとなって始まりました。

以下、日本基督教団常盤教会＝いわき食品放射能計測所で交わされた皆さんのお話を整理して、ご紹介いたします。

2020年10月19日 川上直哉 記

——まず、大川先生ご夫妻から、福島県いわき市に転居されて、どんなことを感じておられますか、お話しくださいませんか。

大川牧師ご夫妻：

今年4月に、岩国市の教会からいわき市の常盤教会へとやってきました。常盤教会には「いわき食品放射能計測所」があります。まだわからないことだらけですが、「TEAM ママベク」の皆さんに教えていただきながら、ゆっくり色々なことを学ぶ日々です。

去年まで住んでいた岩国は「人口の1割は米軍関係者」という場所でした。たくさんの戦闘機があつて、地位協定があり、国の補助金があつて、何かにつけて、弱い市民は泣き寝入りだった。その中で苦しい思いをしながら、教会を拠点に、できることを探して過ごしてきました。でも、例えば

情報開示請求をしても「黒塗り」のものばかりが提示される。21年間、そんな日々を過ごしてきました。状況は良くなるらない、ということを経験してきたのです。

今、いわきに来て「同じだ」と思わされています。市民は「泣き寝入り」させられているのが、同じだと思うのです。結局、国策が先に立つ。

振り返ってみますと、私たちは30年近く前、泊原発を対岸に構える北海道岩内町の教会にいました。そこで、原発の勉強会に参加したことを思い出しています。今から30年前です。福島原発事故も、まだなかった時です。本当に、難しかったという

印象が残っています。「原発は安全です」と、すごい量のアピールをしながら、地域にあった大きい企業は、だんだんと離れて行く。そしてふと見ると「事故の時は、これで道路を封鎖するのだらう」と思わせる大きな設備が、幹線道路に整えられていく。そして同時に、道路は大きくなり、大きな建物（いわゆるハコモノ）がどんどん建設される。その維持費がかかるようになる。結果「原発を必要とする生活」になっていた。それを、北海道で、私たちは間近に見てきたのです。そしてそれは、岩国でも、ほとんどまったく、同じでした。

そうした経験から、「国」というのは、市民を考えると限らないと、これは肌身

に感じてきたことでした。「自分たちの街を、住民たちが、自分たちで考える」ということを応援する、という役割を行政が担ってくれたら、こんなことにはならなかった。そう思います。現実には逆で、「住民が国に逆らうとなれば、町をずたずたにしてくる」というのが、北海道でも、山口県でも、そしてここ福島県でも、起こってくる。

住民同士が分断されるということが悲しい。そう思います。

まだ、私たちはいわきにきて、半年です。まだ慣れなくて、まだ何もできないけれど、でも、今、未永く、ここにずっといたいと思っと思っています。

——大川先生ご夫妻は、「岩内」「岩国」「いわき」と、転居してこられたのですね。「岩」つながりの不思議！そして、その三つの箇所、日本全体を通貫する問題が見えたことを伺いました。それでは、大川先生と一緒に計測所の働きを進めてくださいます「TEAM ママベク」のお二人に、改めて、今の思いをお聞かせいただけますでしょうか。

「TEAM ママベク」の千葉さん：

私も、いわき市に転居してきた者です。夫の転勤でした。転居して三年経った時、東京電力福島原子力発電所の爆発事故が起こったのでした。

事故が起こって、生活は一変しました。「子どもをどうやって守るか」が、スタートラインでした。事故直後から、市民が分断されて行きました。「大丈夫」と思う人が大多数で、

「いや、目には見えないけれど、子どもに影響があつてはいけない」と思う私たちもいた。それで、「どんなことを考える親の許で育てられるとしても、すべての子どもたちが、守られなければならないはずだ」と、私たちは、焦りを覚えたのでした。

まず、自分の子どもたちについて、高い放射線量の中で再開された学校行事への参加を控えるようにしてみたのですが、それでは不十分だと思いました。子どもたちの「肉体」を守ってあげても、学校の中で起こる同調圧

力が凄まじい。それをどうかわし、子どもたちの「精神」を、どうやって守ってあげるか。悩みました。

友人とふたりで「ガイガーカウンターで測ります」と伝えていきました。そうして連絡をいただいた方とお茶会を開いてネットワークを作って、ゆっくりつながりを広げて、そして、原発事故から2年後に「いわきの初被曝を追及するママの会」を立ち上げたのです。

私たちの間では「いわき市は低い線量で助かった」という雰囲気がありました。でも実際には、いわき市内の4歳の男の子が「ヨウ素被ばくの最高値」を示したのです。そのことは、NHKでも報道したことでした。でも、それは広く知られることもなかった。

私たちは危機感を強めました。それで、測定チームも立ち上げて、公園のサンプリング調査をし始めたのです。すると「行政が発表

している数値」は「私たちの知りたいこと」と違う、とわかりました。それで、行政に申し入れを開始しました。

最初、どんなに「要望書」はをもっていても「ただ聞いてもらう」だけでした。でも「数値」を持っていったら、協議が開始されるようになりました。それでわかりました。数字で見せないと、モノを言っても通らない、特に「母親」という立場からの発言の場合、そうだと知らされた格好です。

逆に「母親」の視点が活きた場面もありました。教育委員会と相談を始めてすぐ、ある専門家が私たちの活動に厳しい批判的態度を示されました。その専門家の先生が高校で放射線について教えた時、一人の学生がその講義に参加しなかったそうです。そのお話を聞いて、私は「例えばそうした学生の親御さんの不安を、解除したいのです」と申し上げました。子どもを育てる親の一人として、心を込めて語る言葉でした。するとやはり、その専門家の方も理解して助力してくださるようになったのでした。

私たちは、私たちらしいやり方で、「子ど

もたちの行動パターン」に沿った計測作業を進めました。それは、行政のやり方とは、大きく違ったのです。すると、強制避難地域となった「飯舘」や「大熊」と同じレベルの土壌汚染も確認できました。そうして得られたデータを共有しつつ、教育委員会や除染課などと協議を進めて、私たちは具体的な対策を求めました。私たちの思いは行政や教育現場にも伝わり、皆さんが、協力してくださるようになって、今に至ります。

常盤教会と計測所には、本当にお世話になっています。この場所でずっと、「ママ café かもみーる」というお茶会を続けています。そうした優しい雰囲気の中で、現実の具体的な情報を、みんなで共有して行きます。そうでないと、拒絶されてしまう。それほどに、私たちの目の前にある状況は、過酷なのだと思います。

みんなと仲良くするためにどうするか。いつも考えています。垣根を低くしていく努力を続けているのです。敵を作らないようにしないと、問題を共有できなくなってしまう。

——そんな千葉さんの活動に、内田さんも参加された。

どんな思いで、今日まで過ごしてこられましたでしょうか。

「TEAM ママベク」の内田さん

私は、いわき市に生まれ育ちました。小学生の子どもを育てていました。そんな時に原発事故が起きました。ちょうど、2011年4月に茨城県へ家族で引っ越しをする予定でしたが、それが足止めとなり、やむなく近くの小学校での20日間の避難所生活が始まりました。あの時の言葉にならない張り詰めたひんやりした空気は今でも忘れられません。放射能を吸い込まないようにと濡れたティッシュを挟んだマスクを当てた子供のたちの顔半分はすぐにかぶれてしまいました。また熱を出したり体に蕁麻疹が出来たりしました。高齢の父は咳が酷くなり気管支炎のよ

うな状態となりました。他にも喘息で避難所から救急車で運ばれた方もいました。20日ぶりに水道が復旧し、ようやく散らかった家の中を片付けられるようになり、同時にやっとの想いで探し当てた遠方の運送業者さんに迎えに来てもらい、急ぎ足で茨城県へ引っ越しをする事が出来ました。

2011年の夏が過ぎた頃。子どもたちは鼻血を大量に出しました。40分間も止まらず「血の固まり」が繋がって出て来て驚きました。病院では簡単に鼻の奥を焼きました。「放射能とは関係ない」と言われた事もあります。でも後になって、福島

知り合いの子供たちの多くが原発事故後間もなく同じように大量の鼻血を出していたと聞きました。そのさなか「鼻血は被爆とは関係ない」という言説が広範に流布して行きました。とても複雑な気持ちになりました。何を根拠に言っているのか…周りが何を言っても「信じられるのは目の前の子どもの事実のみ」と、思い定めたのでした。

引っ越しの際、何も考えず住民票を移しました。するとすぐ「もう福島県民ではないから」という扱いを受け、言葉を失いました。「福島県から捨てられた」という絶望感。「県外に出たら終わりだ」という現実が、そこにあったのです。福島県内の情報は殆ど入らなくなりました。心は孤立していました。似たような境遇の人と繋がる手だてがなく、前に進めない。子供の医療費は数ヶ月全額自己負担となり、生活はとても大変でした。やがて「避難者登録」をする方法を見つけ、そこから話せる仲間と繋がり助け合いながら、5年間、茨城県内で過ごしました。

私たちがいた場所もいわき市と同程度の放射線量でした。すぐ近くの間所では「心

臓に問題のある子ども」の数が多いとも聞きました。息子は、通っている小学校で大分嫌な事をされてきました。あまり言葉には出しませんでした。辛かったようです。関心もなく福島の現実を知らない為に、何も悪くない子どもたちが学校の見えない所で責められる。何を優先するか思い悩み、私達は、覚悟を決めていわき市に戻ることを決めました。

単なる同情ではなくて、これからも私達を知ってもらおう事で、皆さんが同じ経験をすることのないように気をつけてもらいたいと思います。元に戻れない事もあるのなら今を後悔のないように過ごしてもらいたい。子供や若者たちの未来が安心できる形となるように。そう思っています。



——宮城県石巻市にお住いになりながら、原発事故の問題と向き合っておられるのが「子どもたちの健康を考える会・いしのまき」のお二人ですね。どんな経緯で、活動を進めてこられましたでしょうか。

「子どもの健康を考える会・いしのまき」の齋藤さん：

震災前年(2010年)に退職をして「ゆっくり」していたら、震災になりました。石巻にある私たちの家に、津波に乗って「がれき」が襲ってきました。悪戦苦闘しながら三日を過ごし、長靴を履いて、自分の教会に行きました。そこでは被災地支援活動が動き出していました。教会で活動しているボランティアと出会って、「正気」に戻った気がしました。

震災以前から「原発」が生活とどう関係

するのか、ずっと、学習会をやって学んでいました。震災後に、その仲間と、近況を語り合う会を持ちました。2011年の5月でした。その時、ここにいる佐藤清吾さんと出会ったのです。津波で身内を亡くされたお話を直接聞きました。そして、その時の清吾さんの、被災地域での働きに、びっくりしました。

そして、以前から親しくしていただいていた大谷尚子さん(下記の書籍を参照)が、

私たちに声をかけてくださいました。「3.11後」の日常は、変わっているはずだ、特に成長期の子供には、影響が出るから、よく見つめるべきだ——日常生活を取り戻しながら、そう語りかけられて「どうやって子どもたちを見ていったらよいか」と、宿題を与えられた思いがしました。



大谷尚子 他 著
『3.11の子どもと健康』
岩波ブックレット、2017年

石巻市では、自家製野菜は検査してくれ

るけれど、土は、測ってくれませんでした。その中で、東北ヘルプと出会いました。計測所は、土を測ってくださるといふ。とても助かりました。

東北ヘルプのつながりの中で、福島との温度差を知らされるようになりました。そして、今日も、ここに来たのでした。

石巻は津波の被災地です。多くの方が、県外から支援のためにやってきてくれました。今日ご一緒の長沼さんもそのおひとりです。そうした仲間の中で、子どもに恵まれたご夫婦がいました。そのご夫婦は、どうやって被ばくから新しい命を守るか、と、真剣に考えるようになっていました。実際、お母さんとなったその方が尿検査を受けましたら、放射能が確認されたのです。幸い、母乳には、放射能が確認されませんでした。そうした友の力になりたいと思い、私たちは「子どもの健康を考える会・いしのまき」を開始したのでした。心配を語ると、周囲が引いていく。「その苦労を、私たち共に」と思って、活動を続けています。

——長沼さんは、山口県から、震災支援のために石巻に移住して下さったのでしたね。

「子どもの健康を考える会・いしのまき」の長沼さん：

はい。私は、2011年3月に山口県で被災しました。大川先生と同じですね。原発事故が起こって、気づきました。自分は、「安全神話」を批判してきたつもりでしたが、結局、その空気を吸ってきたのだ、と。「他人事だった」と思われたのです。福島原発事故は、私にとって、決定的な出来事でした。「放射能の問題は、若い人に任せられない」と思いました。それで、とにかく被災地へ、と思いました。

2011年の5月には、被災地にやってきました。津波の被災地で、震災支援に埋没して、放射能のことは疎遠になっていました。でも、ふとしたときに、石巻市のそばにある東北電力女川原発のことは、見えていました。そして「この湧き水には放射能があるかもしれない」と思いながらも「しょうがない」と、心配は口に出さず、

水を飲んでいました。そういう人々と出会ったのです。そのうちに「汚染ワラ」の焼却問題が出てきました。爆発した原発から大量の放射性物質が放出されましたが、その多くが、宮城県を通過していきました。そして牧草が汚染され「汚染ワラ」ができてしまったのです。それは巨大な量となりました。処理に困った行政は、結局、それを一般廃棄物と混ぜて「一般廃棄物処理場」埋め立てに処分し、国・県の役人まで来て「安全だ」と強調されました。でも、私たちは力を合わせて監視活動を続けています。しつこく、丁寧にやっているのです。

今、皆さんのお話を聞いて、そんなことをまざまざと思い出しています。

石巻にいて、数は多くないけれど、声に出せない不安がいっぱいあって、それを押

し込めていたり、周囲に押しとどめられていたり、そういうことがたくさんあるのだらうと思うのです。今、「10年」という節目です。もう一度、耳を傾けたい。そう願っています。女川原発については、女川町・石巻市両方で、議会が再稼働を容認しました。結局、心が自由にならない、という事が、この背後にあるのだと思うのです。



——住まいの近くにある女川原発と向き合い、数十年を過ごされたのが、佐藤さんでした。

佐藤清吾さん：

はい。私は、南三陸町との境を接する石巻市の純漁村地帯で、漁協の責任者をしてきました。福島沿岸の人々とも付き合ってきました。「原発は、何も問題が起こらなければいいけれど、何かあった時には取り返しがつかないものだ、絶対だめだ」と、言ってきました。平和なうちは、笑われたものです。「また十三浜の佐藤さんが変なことを言っている」と、異端視をされながら、でも、めげないでやってきました。

日本各地は、海でつながっています。たとえば、青森県の六ヶ所村の再処理工場という核施設が、今、本格操業を延期され続けています。私はずっと「本格操業をすると、親潮の流れの先まで、漁場が汚染されるから、漁業がだめになるぞ」と主張してきました。六ヶ所村に、県の漁協代表として、意見を続けました。でも、帰ってきた返事は「安全神話」を振り回すものばかりでした。そして、最後には、こうなった。

東北電力が、女川原子力発電所で、「プルサーマル発電」をやるということになって、漁協に、東北電力が説明に来たことがあります。その説明の席では、私だけが、何時間も食いついて聞きました。実に「嫌な顔」をされました。私はかまわず「原子力発電は安くない。後始末に金がかかる。事故があったら大変だ」と、言い続けまし

た。でも、地域の人々は、東北電力からの経費で「研修」に招かれ、結局、考えを固めてしまう。私が反対を語ると、みんなで攻撃するようになるのです。「なんでそんなことを言うのか」「30年も無事故だった」と、私はずっと、仲間から攻撃されました。でも、私は頓着せず、反対を通してきたのでした。

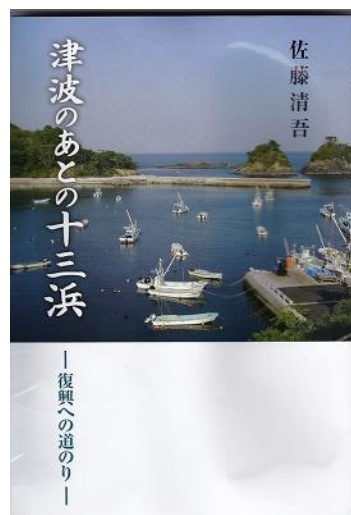
十三浜が石巻市に合併して、私は市の総合計画の委員となりました。そしてまた、プルサーマルについての会議がありました。結局「全会一致」で決まってしまいました。私は「せめて避難の仕方だけでも考えてくれ」と注文を出しました。そして、そのことは「継続審議」となって、震災の少し前に会議が開かれ「原発は絶対安全」と聞かされることになりました。そしてその実に2か月半後に、福島第一原子力発電所の事故が起こったのです。公開質問状が出されました。でも、石巻市長は、いまだに答えてくれません。

震災後、漁業の復興にずっとかかわってきました。その中で気づかされます。関西地方などのスーパーで、東北の海産物は置かれなくなっている。韓国などの海産物に、棚は取られてしまった。「微量であっても、放射能が計測されると、扱えない」と言われるのです。

私が直接関係している中で、35の漁協がありました。でも、その中で原子力政策に反対しているところは一つだけでした。岩手県にも一つだけ、あったな。多くの人は無関心なのです。それどころか、「国策としてやることに反対する危険人物」ということでしょうか。公安警察が、いつも身辺をついて回るようになりました。組合にも、自宅にも、来るのです。私はいいのですが、妻は嫌がりました。まさに、それが狙いなのでしょう。そして、事故が起こったあと、1年たって、避難所となった温泉旅館で、屈強な雰囲気の方が声をかけてきました。かつて、私に付きまとった公安の人でした。その方は「佐藤さん、おっしゃっていたことが、ほんとになりましたね」と、言ってくれたのを、忘れることができません。

この地域の人間が、この地域の仕事を生業として、この地域で生きているのだから、この地域をなくしてはだめだ——そう思

ってやってきました。「福島第一原子力原発所」が爆発する、とは、さすがに思わなかったのですが……。以前から持っている思いは、今もちろん、変わりません。でも、今でも、多くの人が、わかっていない。女川原発の再稼働が、決まりました。これだけのリスクがあるとわかったのに「一部の商工業者がお願いしたから」ということでは、それは短絡だと思います。



佐藤清吾 著
『津波のあとの十三浜』
定価800円＋税

※お求めは
TEL(FAX)
0225-96-2008
齋藤みや子さん
sendai@
ttohokuhelp.com
まで、どうぞ。

——なるほど。皆さん、お互いのお話を聞いて、どんな思いを抱かれましたか？

大川牧師：

佐藤さんのお話を聞いて、山口県の岩国でも、そうだったと思い出します。そこは「米軍基地」の問題でした。たくさんの方の不条理に人々は実際に苦しんでいました。でも、実に「選挙」となると、市民の声とは違う力学が働いてしまうのです。そんな現実を、何度も見ました。それでもあきらめずに進むことが、どんなに難しいか。

千葉さん：

市民派の議員さんに、原発反対の人がいます。「母親」の立場からの訴えを議会にもっていってくれる仲間です。行政協議をするときは、同席をしてくれます。そうすると、やっぱり、行政協議の雰囲気が変わるのです。今、いわき市議会37人の議員の中で3人の仲間を得ています。自民党の

議員とも仲良くなって、一緒にできるように努力しています。汚染水の陸上保管の継続を求める請願は、そうして、全会一致で採択にこぎつけたものです。それはつい半年前の事、2020年6月18日の事でした。たくさんのお話し合いをした結果でした。それは、とても苦しい話し合いでした。でも、一つの成果を上げたと思っています。

佐藤さん：

各地の漁連も、全部、汚染水の海洋放出には、反対しています。

千葉さん：

でも、国が影響力を発揮してくる中で、いわき市議会では「放出をやむなし」とする声は強いのです。

佐藤さん：

原発事故現場から生み出される汚染水は、「一回流せば終わり」ということで済まない。そこが、本当の大問題です。これから何度も放出することになるでしょう。海が、どんどん汚染されることになることを心配します。もちろん、政府は「安全」だと宣言するでしょう。でも、今のところ、その内容も不確かだと思うのです。

——今、福島県内の子どもたちの状況は、どうですか？

千葉さん：

子どもたちは、2年に一回のペースで甲状腺検査を受けています。医師の人数的な制限から、そうなっているようです。今、出てきている数字を改めて確認すると、小児甲状腺がんは、やはり多いのだとわかります。「200人」を超える人数で、小児甲状腺がんが確認されているのです。

数年前「モニタリングポストを撤去する」という動きがありました。そうなれば、いよいよ風化が進み、子どもたちを守れなくなってしまう。それで、福島県内の仲間がつながって、会を立ち上げました。子どもの環境に設置されているモニタリングポストが撤去されるという問題でしたので、母親の声を高めることが特に必要でした。お茶会は、いわき市以外の地域で

長沼さん：

女川原発再稼働反対のために、私たちも努力を続けました。でも、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、今年、活動が制限されてしまいました。その結果、あつという間に「再稼働」への動きが加速してしまった、という感じで、残念に思っています。

も開催してきましたので、地域を超えてつながってきた母親のネットワークが、ここで活かされました。常磐教会を拠点として行ってきたお茶会がこうした成果を上げ、モニタリングポストは設置され続けています。

皆さん、孤立するとどんなに大変かを体験的に知ってきたので、今、活動すべきと思っているのだと思います。私たちも、いわき市での活動から得られた知見を、各地のお母さんたちと共有していています。

「子どもをだれが守るのか」と、私も、そう思っているのです。

佐藤さん：

義憤に駆られているわけだ。なるほど。これからも一緒に、頑張っていきましょう。



いわき市の内郷駅から歩いてすぐの距離にある日本基督教団常盤教会

この教会の建物のなかに、「いわき食品放射能計測所・いのり」が、あります。

巻末言：「10周年」に向けて

「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」を目指して

ニュースレター2020年クリスマス号をお送りしました。全体の基調は「10年」にあったと思います。「10年目の被災地」を、「震災10周年」に向けて進む、その現場の雰囲気をお読みいただければと思います、編集を進めてまいりました。

最後に、「震災10周年」を覚える催事について、告知と共に、インタビューを掲載させていただき、巻末言に代えたいと思います。

「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」という催事が、2012年から、超教派の働きとして、毎年、行われてきました。「10周年」となる次回2021年3月は、大きなイベントとして行おうと企画されていましたが、「新型コロナウイルス感染症」の混乱の中、変更を余儀なくされました。

2021年の「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」は、「東北応援団 LOVE EAST」の皆さんと一緒に、Youtubeでの配信の形式をとることになりました。その準備を進めておられる実行委員会から、栗飯原順さん(救世軍仙台小隊)、阿部一さん(石巻祈りの家)そして中澤竜生さん(東北ヘルプ理事)をお招きし、Zoomで、話し合いをしていただきました。

お話は、「10年目の被災地」の現実の困難と「10年間の成果」を語っていただき、その上で「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」の意義を語って頂くものとなりました。

被災地の今を知っていただくために、ぜひ、ご高覧下されば幸いです。



(2020年10月20日 事務局長 川上直哉 記)

—まず、この10年を振り返ってから、「10年目の被災地」の課題について、お話しくださいますでしょうか。

中澤：震災後すぐ、私は南三陸町に支援に入りました。そして今年、9年目となります。今年の最初までは、だいたい、予測した内容で、支援活動は進みました。仙台の宣教センターから南三陸町に通い続けながら、避難所から復興公営住宅に至るまでの、被災地に生きる人々との「関係」を豊かに結び、あるいはそこに「ケア」ということも考えさせていただき、一步一步進んでいるという実感が、私のなかにはありました。

そして今年、3月に「10年目」の日々を送る中、予期せぬ「コロナ」という感染症の拡大に見舞われました。まったく、事態が変わってしまいました。

仙台から南三陸町に通い続けた私の活動は、しばらくの中断を余儀なくされました。というのも、昨

年あたりから南三陸町の「社会福祉協議会(社協)」のみなさまとの連携を強化してきたからです。社協ご自身は「長距離移動はお控えください」と啓蒙しなければならない立場です。実に、南三陸町から見て「仙台」という場所は、はるかな長距離の向こう側、と見えるのです。そうして私は、現場に出られなくなりました。それだけではありません。被災地の外部に向けて行う啓発活動も、できなくなりました。

結局、「10年目」となった今年、私は、ほぼ、活動ができていない状況にあります。それでも、つながった「関係」は生きています。それで、苦肉の策です。「電話のやり取り」を中心に、かかわり続けてきました。でも、そうしてみても、いよいよ、はっきりわかりました。「行ったときに会う」とい

うことが、どんなに大切であったか。「顔を見て、声をかけること」。そうして、そこでの言葉で、状況を受け取っていく。それが、決定的に大切なことだったのです。それが、できなくなった。

この半年あまり、ずっと、悩んできました。

秋ごろになって、南三陸町を訪問する活動を再開しました。でも、やっぱり、家を訪ねることは遠慮

* * *

栗飯原：私たち救世軍は、今回、アメリカや香港をはじめとする救世軍のネットワークからの支援を得て、様々な被災地支援事業をやってきました。その中でも特に、女川町の支援に取り組んだことが、この「10年」を振り返って、特筆すべきことだったと思います。東京にある小隊（「教会」にあたる）とつながりのある方に、女川にゆかりの深い方がおられました。その方のつながりの中で、女川町を中心に、被災地支援を展開したのです。実に全国から、支援の人々が女川町に入りました。そしてそこから南三陸町、さらに岩手県の大船渡市にも支援を展開いたしました。私たちは、当初、津波で流された漁船、送迎用の車、トラック、そして離島の発電施設などを提供させていただきました。

そうした中で、私は2017年に仙台に赴任しました。それまでは、東京にいたのです。そして、2011年には、香港で仕事をしていましたが、2010年に献身（キリストのために自分の人生をささげようと決心すること）をしていました。そして、震災になり、日本でキリストのために働こうと思ってすぐ、石巻に来ました。そして、その惨状に衝撃を受けたのです。帰る時、「また戻ってきます」と近所の方に言ったことを、今でも忘れません。結局、震災支援活動に参加して、私は自分の人生の進路について、確信を持ったのでした。

2015年に救世軍の士官学校に入りました。そのころ、女川町では、仮設の「きぼうのかね商店街」が運営され、それが「シーパルピア」と展開していく中でした。救世軍は、その歩みに伴走させていただきました。

最初、町が壊滅していたのです。通常は、水や食べ物をお届けするのが私たちの役割です。でも今回は、生活も生業もなくなった。まず、人が集まり、日常の生活用品を購入し、活動する場所が必要だということで、商店街を仮設で作るお手伝いをしたのです。いったんはバラバラになった町が、そのいくつかだ

しています。それで、手の届かないところで、自分の考えていないことが起こってくるのではないかと、強い不安を感じています。

そして当然、被災地の外部への講演啓発活動も、できないのです。私たちの活動への支援も、減ってきています。そうした心細さの中で、今、「10周年」を迎えようとしています。

けでも、つながりを取り戻した。そこに自分たちは遣わされたのだ、と思っています。仙台と、女川と、遠距離を行き来しての支援でしたが、ちょうど、これから一歩踏み出す、という場面にお手伝いができるという感じを覚えています。

救世軍全体としてみても、コミュニティ回復のために「ビジネス支援」という事柄に携わったということは大切な機会となりました。一番大事なのは、地域の方々がNPOを立ち上げ、商店を立ち上げる際、支援するのですが、しかし未来永劫支援できるわけではないことを自覚して、自立ということをも重視すること。「自立に立ち会えるのだ」ということを自覚する時に、ビジョンがはっきりしてくると思います。

しかし今、やはり、厳しい状況にあります。女川でも、人々の生業は立ち上がりました。2016年にキックオフになり、2018年、全体像が見えてきて、2019年には軌道に乗り始めていました。「さあ、これから」というときに「コロナ」になって、お客様が減ってしまった。そして更に、外部からの支援は、弱っています。

しかし、それでも、被災地の皆さんは「ちゃんと立って、活動している」。その姿を見ながら、私が、励ましを受けています。「自立をする気持ち」とは、こういうものかと、励まされているのです。

具体的には、たとえば、ある福祉作業所のことを挙げることができます。独自の技術を持って、おいしいパンやワカメを製造販売しています。その商品の品質は高く評価され、強みのある商品となって、順調に進んでいたのです。しかし、売り上げが「コロナ」で激減しました。でも、希望があるとおっしゃるのです。やせ我慢ではなく、「いろんな苦難を乗り越してきたのだから」と、前向きです。「実際、2011年3月11日は、新しい作業所がオープンする当日だった。それが、全部流された。それを、もう

一度、立ち上がったのだから」と言うのです。すごいと思いました。この人たちは、自分たちのビジネスだけではなく、子ども食堂も、ずっと続けて来たのです。子どもたちは40人くらい集まっていた。自分たちも被災して大変なのに「町には、食べるのも難しい子供たちがいる。シングルマザーもいる」と言って、場所と時間とを切り出した。ビジネスだけではなく、町が立ち上がるために、自分たち

* * *

阿部：私は石巻に住んでいる中で、被災しました。2008年に、様々ないきさつから、自宅で「家の教会」を始めていましたが、その3年後に、「3.11」になったのでした。3月末に、ルーテル同胞教団のディーン宣教師が、私の古い仲間と一緒に、仙台から物資をもってやってきてくださいました。そうして、私たちの支援活動は始まったのです。

私たちの教会は年配者だけで構成されていました。でも、知恵を働かせれば、活動はできる。そのことを学んだ10年でした。例えば、「物資配給」においては「必要なものを、必要な人に、必要なだけ」支援できるシステム、しかも、その支援で「被災地域にお金が落ちる」システムを考えて、実行しました。そのシステムは石巻市内の他の場所でも活用され、そこからコミュニティーの再構築へと展開しました。また、国際NGOの責任者もこのシステムに注目してくださり、それを協力して下さっています。

私たちの教会は月報を出しています。この月報が、被災地と全国をつなぐメディアになりました。です

——以上、お互いのお話をお聞きになって、

「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」について、どんなことをお考えになりますでしょうか。

中澤：今、「10年目」の被災地にいる私たちは、大切なポイントに差し掛かっていると思います。たとえば、ここで私たちの活動がストップすることになったとしても、今のこの時点が、とても重要だと思うのです。

阿部さんがお話くださったことから、二つの点が指摘できると思います。一つは、現場の人々を孤立させないこと。もう一つは、孤立させないために、クリスチアンのネットワークが地方でつながっていくことです。この二つのことは、まだまだ「道半ば」です。今、私たちが10年目の被災地に立って、「10周年」を迎える中で、この先へと、どうつなげ

をささげようとしているのです。自分たちのことだけで、必死だと思う。でも、女川の方々は、自分たちだけではなく、町のことを考えている。向かう方向がクリアになっています。ビジネス支援の観点から言っても、そこには「継続する力」が生まれていると思います。他者のために、ということが原動力になっているのです。きっと、皆さんは、この苦難を乗り越えることができるだろうと思います。

から私たちは、「支援された物資」を配布するだけではなく、「支援した人」の心にもお応えできるように、ずっと、心を向けてきました。

今、少なくとも石巻では、被災者の皆さんのほとんどが、仮設住宅を出られました。そうして、私の具体的な支援事業は、だいたい終わったのかな、と思っています。この10年で出会った方々との個人的な連絡は、なかなか、難しいものです。それでも、時々、私たちの教会を訪ねてきて来てくださる方がいます。そうしたことに、感謝している毎日です。

この10年を通じて、石巻圏内の諸教会が集まって、つながったことは、本当に素晴らしいことでした。時間の経過の中で、震災直後のような活動は、できなくなってきています。それで、また、被災者に寄り添い続けるために、「追悼記念会」があります。それは、この10年の活動の成果である「教会のつながり」を維持展開するために機能しています。それは本当に意味のあることだと思っています。

ていくのかということが大切な課題です。そのためにも、私たちの追悼会は、無くなってはいけないものだと思います。

粟飯原：私は東北にあまり縁のない人間でした。だから、追悼記念会を担う「実行委員会」に参加させていただき、感謝しています。救世軍の士官（「牧師」にあたる）は「転任する」と決まっています。つまり「未来永劫 同じ場所にはいない」のが私たちです。そういう自分としては、この場所でコミュニティーに入るために、「そこにいる」ことが大事だと思うのです。本当に、集まりを大切にしたいと思っています。

実に、コミュニティーの分断は、どこでも進んでいます。みんな、住む場所も仕事も、違う。その違いは、当然なのです。でも、その違う人々が一緒に生きることを目指さないと、ダメだと思うのです。コミュニティーが、再生することが必要です。そのために、追悼会に、役割があると思っています。つまり、それぞれの現場の苦労話を聞き、課題を聞き、成果を聞く。聞きながら、イエス様がなさる回復のミニストリーの一部として、自分も働く、その手掛かりを得るのです。そのためには、他のコミュニティーにつながる事が重要だと思います。そうして、コミュニティーは活性化し、あるいは回復をして行く。津波や原子力災害、あるいは貧困などによって傷ついたコミュニティーは、決して「10年」で回復するものではないと思います。むしろ、コミュニティーの再構築は、ずっと、続いていくはずで。そして、新しくいろいろな分断が、また、起こっています。「居場所がない」「注目されたい」という思いがこじれて、問題は深刻化しているのです。今、私たちは、この「10周年」の催事を用いて「イエスの弟子はこうだ」というビジョンを示したいと思います。

中澤：今回の企画は「東北応援団 LOVE EAST」の皆さんとの協力の中で構築されました。「東北応援団 LOVE EAST」は、東日本大震災を念頭に、関東で、岩淵まことさんを中心に、始まったものです。それは、「東北」「関東」といった垣根を乗り越えて、つながりの中で自分たちのコミュニティーを再構成し続けようとする働きであると思います。今、アーティストの方たちは、本当に大変なことになっています。その中で、この企画を通して、もう一度時間と経済を犠牲にして愛を注ぎ出そうとされている。本当に敬服します。

今回の企画では「歌」だけでなく、「言葉」も配信することになっています。テレビカメラを現場に

持ちこんで、互いに現状を語り合うということ、企画の中心に据えているのです。

栗飯原：被災地の状況から学んだことを、それぞれのコミュニティーに展開する。その働きを広げていくということ。ここで学んだことを自分たちのコミュニティーにつなげるために励まし合う機会となること。——そんな企画になればと、そう願っています。

中澤：はい。追悼会には、目的があるのです。支援はどこかで「引いていく」ということが定まっています。つまり、支援活動には、終わる可能性、いつもある。だから「教会」がセーフティーネットにならなければならない。そう思います。キリスト者が被災者と関係を作った以上、教会がそれを守る、ということが必要だと思うのです。そこにも、追悼会をみんなで作り上げる事の目的があると思います。

阿部：最近、20代後半の若い人が、教会に来ました。自分を制御できない人のようでした。役所の壁を、激しく叩いて、周りの人が困ってしまったそうです。それで、社協から「教会に行ってお話を聞きましょう」と勧められた、と言っていました。

被災支援事業で、教会の敷居は低くなりました。でも、今、地域の人が教会を訪ねることが、少ない。それはなぜか。それを考える機会が必要だと思います。この「10周年」の催事は、そういう可能性を持っていると思うのです。そのためにも、地域の教会がまず、仲良くして行きたいと思います。

栗飯原：食物があっても、一緒に食べる人がいない。そういう貧困が、最も厳しい形で表れている。それが今ではないかと思います。それを解消する働きにかかわりたい。東日本大震災から、そうした働きへと広がるなら、その時きつと、「復興」という言葉が真実になると思うのです。



「宮城南三陸 3.11 追悼記念会」ホームページ
<https://miyagi3riku3011.jimdo.com/>
是非、ご高覧ください。

会計報告

2020年10月20日 東北ヘルプ事務局

2020年度も、半年を過ぎました。右に、直近の収支計算表をお示しします。ここまで守られ支えられましたことを、心から感謝しています。

今年度は「予算700万円」として、活動を続けています（2019年度決算は、8,615,374円の収入、7,995,963円の支出でした）。

2020年10月の「仙台キリスト教連合世話人会」と「NPO法人東北ヘルプ理事会」で報告された進捗状況表は、以下の通りでした。

進捗率			
日数		収入	支出
53%		32%	47%
(365日で10月9日まで)		(700万円の予算対比)	
前年比			
予算	件数	収入	支出
88%	109%	74%	83%

※2019年度予算は800万円

「新型コロナウイルス感染症」騒動で遠距離移動ができなくなり、この半年の活動のほとんどは石巻で行われました。それは、支出抑制を目指す努力への「追い風」となりました。

他方で、収入額が、伸び悩みました。事務局長が遠隔地へ講演などを行う機会が「ゼロ」となったことは、大きいと思います。

月別での献金集計は、右の通りです。今年初めて、夏のニューズレター発行の後に、献金が減少しました。これは初めてのことでした。

「新型コロナ」の騒動は、すさまじい不景気を呼び起こしている、と、警告されています。その中で、私たちの活動が守られていることの不思議と有難さを思います。なお一層、私たちの活動を覚えていただけますお一人お一人の、その尊い一つ一つの献金の、その重さを思わされています。

引き続き、活動の経済的側面が支えられますように、お祈りください。

(了)

収支計算書（全体）

2020.10.13現在	
(単位：円)	
計	
会費収入	-
献金収入	2,296,782
預金利息	2
収入計	2,296,784
給料手当	1,310,000
法定福利費	90,047
新聞図書費	237,165
通信費	234,285
支払手数料	41,969
外注費	335,500
事務費	267,729
広告宣伝費	415,237
旅費交通費	213,164
燃料費	120,445
会議費	51,102
支援費	399,000
支出計	3,715,643
収支差額	-1,418,859
前期繰越	2,154,718
次期繰越	735,859

2020年 献金集計表

	事務局		食品放射能計測所		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
1月	41	456,356	1	96,000	42	552,356
2月	31	327,225	1	96,000	32	423,225
3月	48	1,182,696	1	96,000	49	1,278,696
4月	61	512,955	1	96,000	62	608,955
5月	28	197,003	1	96,000	29	293,003
6月	21	297,534	1	96,000	22	393,534
7月	38	219,500	1	96,000	39	315,500
8月	26	226,750	2	146,000	28	372,750
9月	20	134,140	1	101,400	21	235,540
10月	8	77,500			8	77,500
11月					-	-
12月					-	-
	322	3,631,659	10	919,400	332	4,551,059



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

小河義伸（日本バプテスト仙台基督教会牧師）

※肩書等は、すべて2020年6月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com